

写経 被災者に寄り添う

半崎さん歌声 涙ぐむ人も

読売新聞北海道支社の発刊60周年を記念して札幌市で26日開かれた「薬師寺まほろば塾・札幌塾」（法相宗大本山薬師寺、読売新聞社主催）では、薬師寺執事長の加藤朝胤塾長とシンガー・ソングライターの半崎美子さんの対談などに大勢の参加者が聞き入った。

（大森篤志、水谷弘樹）

薬師寺

まほろば塾

札幌塾



令和で最初に開かれた「薬師寺まほろば塾・札幌塾」（いずれも札幌市中央区で）＝鷹見安浩撮影

北海道地震の犠牲者の冥福を祈って加藤塾長を導師に法要を営み、参加者らと般若心経を唱えた。紀伊水害で被災した奈良県を代表し、桜井市の会社経営堀井清孝さん（53）が写経を奉納。前日、北海道地震の被災地、厚真町での法要にも参加し、「被災者の方々と時間を過ごし、寄り添うことができた」と話した。

同じく写経を奉納した東日本大震災の被災者、仙台市泉区の会社役員中島荘治さん（74）は「厚真町の方の話聞いて、10日近くも電気が使えず、工場がストップした東日本大震災当時を思い出した。自然を恨むのではなく、自分たちも前向きに復興に向かっていきたい」と力を込めた。

加藤塾長と半崎さんの対談では、半崎さんが「自然



熱心に聞き入る参加者

の脅威と自分の無力さを感じた」と振り返った。加藤塾長は薬師寺で行われている写経を紹介し、「コツコツ継続して積み重ねることが、被災者を支える大きな力となる」と訴えた。

厚真町吉野地区から参加した農業西村忠彦さん（66）は「加藤塾長の『この震災を忘れないことが大切』という話が心に残った。昔から親しくして亡くなった人のことを思いながら手を合わせた」と述べた。

半崎さんのミニ・コンサートでは、北海道地震が発生する前日に発売された「明日を拓こう」などを披

露。被災者に寄り添うかのような歌詞に会場は感動に包まれ、涙ぐむ人もいた。札幌市西区の会社員鈴木節さん（68）は「半崎さんの歌声をどうしても聞きたくて参加した。美しい歌声は傷ついた人の支えになると思う」と話していた。

厚真町の兵頭敏枝さん（65）は「各地の被災地で法

要を営んできた薬師寺の方が来てくれ、ただただありがたい。みんなが応援してくれ、自分だけが苦しいのではないと分かり、涙が出た」と感謝していた。

冒頭、読売新聞北海道支社の西寫一泰支社長が「令和最初のまほろば塾を札幌で開催でき、深いご縁に感謝したい」とあいさつした。